

「胃生検アトラス」

国立がんセンター研究所病理部 廣 田 映 五 著

関東通信病院副院長

多賀須 幸 男

胃疾患の診断に携わるすべての人にお薦めしたい好著

よく知られているように、胃生検が容易に確実にできることになって胃癌の診断体系は一変した。それに伴い、どの施設でも胃生検の件数はうなぎ登りで、それをめぐる混乱はいつも話題の種である。そのような中で胃の生検診断の実践的テキストの出現が待望されて久しい。最近に出版された廣田映五著「胃生検アトラス」はこの期待によく応えたもので、更にまた、様々な意味でユニークなところがある好著である。

総論には56頁が費やされ、標本の取り扱い方の詳細、臨床医との対話の重要性、国立がんセンター26年間の貴重なデータなどが書かれている。各論には1.潰瘍を伴う陥凹性病変(24例)、2.潰瘍を伴わない陥凹性病変(11例)、3.隆起性病変(36例)、4.その他(5例)の症例が示されている(食道疾患3例、十二指腸4例を含む)。付録として、国立がんセンターで病理レポートに付記しているコメント集が掲載されているのはいかにも著者らしい。

筆者がユニークであると感じる第1は、典型例で始まり次第に難しい症例になるのがアトラスの常であるが、本書では組織診断が難しいもの、やさしいものが良悪性も無関係に肉眼型順に配列されているところで、読者は常に緊張が求められる。第2は全例で生検材料の全体像がわかる弱拡大、次いで中拡大と強拡大が示され、標本を診ている状況を体験できるところである。それぞれにわかりやすい解説が付けられているが、どの部分が強拡大されているのか著者が述べる所見がどこにあるのか、矢印など一切ない。読者がいい加減に流し読みすることを許さないための工夫であろう。もちろん精選されたカラー写真はいずれも鮮明である。第3は各例で内視鏡写真4葉が示されていることで、臨床医に親しみやすいものになっており、冗長にわたらぬ範囲で切除胃の肉眼像が掲げられている。第4は胃生検材料を診るためのコツと癌研究の最新情報がさりげない言葉で随所に書かれていることであろう。

文字として記載し他人に伝達できるもののみが科学の名にふさわしい

もので、形態学は科学には属さないとの説がある。確かに形態診断は“自分の目で診た像を頭の中に集積し、それを基準に判断する”テクネイである。医学雑誌などに掲載されている典型例の写真を眺めて、わかったような気分になっていた筆者は、本書を見て正直なところ自信を失った。しかし著者の解説はすべて明快で晦渋な所がない。加齢と共に記憶力は低下の一途であるから、本書の組織像を大脳皮質に焼き付けられることを特に若い諸先生に望みたい。生検の組織診断を他人任せにしていれば、胃疾患の良い診療はできないし、それに関する興味も半減する。胃疾患の診断に携わるすべての人々に本書をお薦めする次第である。

著者のライフワークであり、この十数年間は国立がんセンターで責任者として全力を投入している胃生検診断の全経験が、この259頁に凝縮されていると言って過言ではない。言うまでもないが著者は日本の胃病理学に大きな足跡を残した佐野量造先生の後継者で、佐野先生の「胃疾患の臨床病理」を発展させた解説が各所にあり、その本で勉強された諸先生には別の意味でも興味深いものであろう。共同執筆による安易な書物が多い中で、背後にある実践の重みを感じさせる好著である。総カラー印刷259頁で18,540円(税込み)の書価はリーズナブルである。

B5判 259頁 18,540円(本体18,000円・税540円) 1989年 (株)文光堂 刊